

フランスパンさつくり皿につめたきは空洞の丸さまで食はれゆく
大樺昭和永無月丑三の核融合炉前そよぐかな

うちいでて鶴鴿あをし草深野一万人の博士散歩す

闇わたる乳房のさきのむらさきぞ重陽子ふたつ寄らむかがやき

緑黄の乳房チチフサたかくあそばせてプロキシマの女リヴィングを出づ
プロキシマ・ケンタウリの惑星にはうつくしい植物人間たちが暮らしてゐる

鬼蜘蛛のただびろき床はふほかは殺さるるとも桜桃の恋

あぢさゐの片熟れをする球たまの花こころざしいまだ言ふべからざり

世紀なほ黄昏くわんごんならぬなかぞらへしりぞき踊れ陵王の舞

卵中らんちゆうにずぶぬれの雛眠りをりあかねさす日はしづかにとほし

アメリカはいまだ羨しきおそろしき白き大足にわれを跨げり

みづからを嘲笑するにまだ足らぬ夜に慣れゆくやもはや慣れしや

クローンのそのクローンの女なる去年こぞのこよひのぶらぶらの花

おほいなる無価値こそ人を病ましむやオホーツクオホーツクわれは地をゆく

コンピュータコンピューターぷつと止まればどの声も安堵のごとく怒り怒れり

アルキメデス殺ころしの紅顔兵卒もわれも沈丁の香にまみれをり

無人戦車無人地球の街を野をはたはたと晒わらふごとくゆきかふ

富士ほるべ富士ほるべとぞちひさなる富士をいぢめて女童めわらはは座す

この岸に川波の音ほるびをりわれをつつめるぼるぼるの闇

やまとあり砂につどへるすさまじき理のうごきすこし眺めて散らす

白雨すぎ立山いまだ見えざるを言はざりしかばはるかなりけり

われになき青春などといひたりし嘘もおもへよ大鷲の海

凡庸の父にして凡庸のわれなるをたのしまざりし海のゆふなぎ
真赤なるゴヤの巨人にほほよせて妻ねむるかな日曜の午後
火をたもつドラム缶のひくきわらひごゑ東京はとはに吾を容れざらむ
獏を喰ふメタ・獏のごとはるばると群青天下しづかなりけり
甘酸ゆき茎食みゆかなほろると彼岸会の山からたそがるる
名にし負ふ極楽鳥花妻は愛づあはれとばざる種をのこすもの
うつしみは有為ぞ有為ぞと繰るわれにひとつ目の死児膝折りしまま
陽関を越えし柘榴の実のあまた東京の夜を口裂けて冷ゆ
ぼろぼろに酔ひたる父が額つけし電車の床は昭和越えけり
紅白のドラム罐並みししづけさにアラブの砂は国境を越ゆ
綿のごとく大和民族群るときシャンデリア氷のしづけさを垂る
鶏卵のほのかなる死の見ゆるまで藍の雲間ゆ月かがやけり
勝敗の彼岸ならねどほのかなる鷗の指へ潮ながれをり
舟虫の鋼の胴があゆみをりそのしづごころほろぼしがたし
明星のひかりこぼるるさざれ石ことばなき藍を吾子は眠れり
知恵ふかきゆゑくるしまむダイダロス父たるはひくくながく飛ぶべし
みづからを流出させてあそばする液体ヘリウムが羨しくてならぬ
極東を辺境とこそいひかへよ秋津島どつとくちびるの群れ
いついかに父となりしか 子を追ひて雪に汚るる身をゆるしたり
パプロ・ピカソさんらんとして地に死ぬをありあけの馬は見て忘れけむ
おしなべて絶対平衡にむかふとぞボルツマン言へばややに救はる

おほいなる沈黙をわれはうらやむと書きかけてやむ 声の国から

しろき墓しろき夕暮れしろき妻 迷走気流の尾なるそよかぜ

絵師はきて噴水散らす風をいふ世界は風にみつるといへり

半球^{ヘミスフィア}子の脳葉をほつほつと照らしそめけむ ことばの星は

わが妻にオリープのうすきみどりいろ手渡してわれは影となりゆく

すずなりの科学者がひとりまたひとりしたたりて落つレッドウッドを